



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# キヤノン株式会社 －技術開発戦略－

### キヤノン多角化の歴史

5

#### 「右手にカメラ左手に事務機」

1933年にカメラマニア数名によって東京六本木に設立された「精密光学研究所」、当時のドイツ製のライカやコンタックスなどに憑かれて国産カメラ開発に燃えてこじんまりと事業を進めていた。しかし開発の熱意は高く、翌年には「kwanon」を発売している。その後、第二次世界大戦を迎え、一時閉鎖していた会社は早くも45年には再開を決めたその数カ月後には、同士が集まり、事業を開始している。キヤノンのカメラメーカーとしての歴史はここでは割愛するとして、同社は一般写真撮影用カメラ以外の分野で、先ずレーダー撮影装置、顕微鏡写真撮影装置、複写装置、高速撮影装置などが開発・生産されていた。特に戦後、多角化製品の中心となっていたのはX線間接撮影カメラであり、1950年代迄は、その自動化の研究が進められていた。試作品を学会に出品したり、下丸子本社で発表会を開催するなどの活動を続けながら、56年に自動X線間接撮影カメラを発売した。また1953年（昭和28年）から開始されたテレビ放送では当初、各局とも高価な輸入カメラを使用していたが、やがて国内メーカーにレンズの供給を求めるようになり、キヤノンカメラでも35mmから200mmまでの単レンズを提供していった。ズームレンズの開発にも力を入れ、58年に国産初のTVズームレンズで、当時世界最高の倍率のズームレンズを発表した。光学機器以外の分野では59年に〈シンクロリーダー〉が発売される。シンクロリーダーは、印刷物に磁気録音を仕組み、再生装置でその音声を聴きながら印刷物を見るシステムである。図鑑やカタログなどの写真・イラストを目で追いながら、その説明は再生された音を耳に受け入れて理解していくものである。シンクロリーダーは市場を形成できず結果的に失敗作となったが、この開発に投じられたエネルギーと技術力は、後にOA機器類の開発へと引き継がれていき、キヤノンとそのグループを大きく発展させていくことになる。

キヤノンがこうした技術をベースに本格的に異分野に進出し、事業を多角化していこうとするのは、このころからである。企画室が中心となって長期経営計画（5カ年）を策定、62年度を初年度とする第一次長期経営計画で異分野進出の基礎づくりを進め、68年度からの第

---

本ケースは「技術と経営」のコースのために作成した。作成に際しては同社の経営企画本部や広報本部にお世話になった。同社から提供された各種の情報を参考にして本ケースを作成した。 [作成者：許斐義信]